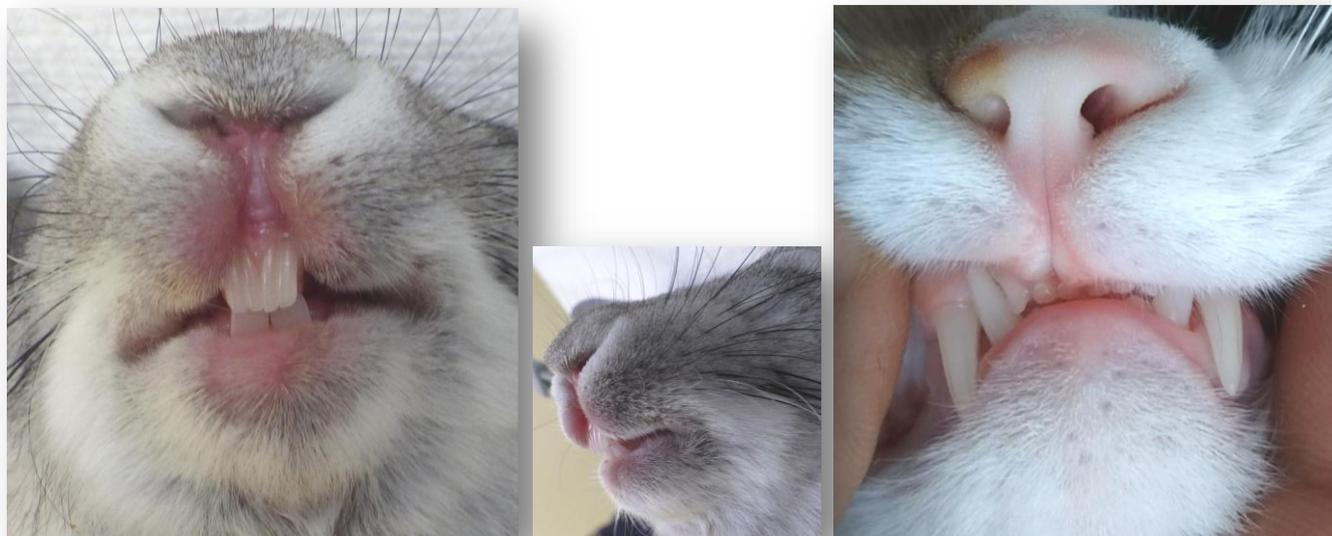


# 飼育（栽培）委員会諸君！



## ウサギの口（くち）はどっち？ 口の話

### 【ウサギの口の特徴】

- ① ウサギは**草食動物**なので、口を大きく開ける必要がなく、逆に大きく開けられない
- ② 長い草を前歯で短く切り刻む必要があるので、前歯が発達している
- ③ 草の向きを操るために、唇が発達している

### 【猫の口の特徴】

- ① 猫は**肉食動物**なので、口を大きく開けることができる
- ② 獲物を逃がさないように犬歯（牙）が発達している

### 【ニワトリ（鳥類）の口の特徴】

- ① 歯はなく、小さな穀類、小石、虫などをついばみやすい嘴（くちばし）構造をしていて、まるのみする
- ② まるのみした穀類、小石、虫を筋胃（砂肝）で粉々にしてから胃袋に移動させる（小石は穀類や虫を粉々にするのになくてはならないもの）





## 根拠に基づく動物飼育

### 第19回全国学校飼育動物研究大会報告 その1

去る、2017年8月19日（土曜日）に、東京大学・弥生講堂に於いて、第19回全国学校飼育動物研究大会が開催されました。

今年は、「新学習指導要領の求める命の教育の実践」を大会テーマに据え、シンポジウムと口頭発表、パネルディスカッションが行われました。

興味深い発表、新しい手法による教育評価方法の提案がされました。



シンポジウムは「新学習指導要領が求める命の教育をどう実践するか」について、生活科について文科省調査官・渋谷一典先生、道徳科について聖徳大学大学院教授・吉本恒幸先生、特別活動について帝京大学教授・若林彰先生、獣医師側から福岡県獣医師会・處愛美先生がお話しをされました。

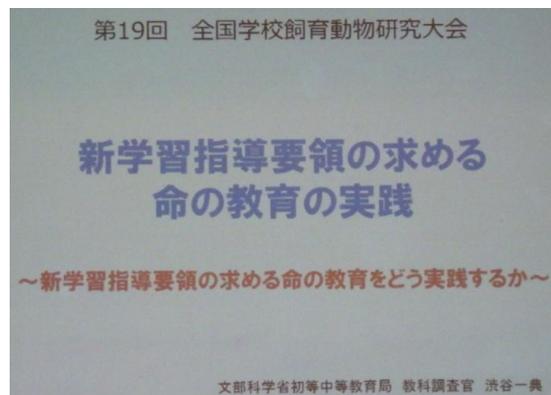


文科省教科調査官・渋谷先生（以下、抄録より抜粋）

～学校における動物飼育活動と「主体的・対話的で深い学び」～

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、生活科の目的である「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の涵養を、偏ることなく実現されるよう年間を通して単元の内容、時間のまとまりを見通して授業改善を図ることが大切。

生活科の「動植物の飼育・栽培」に関しては、引き続き、一時的・単発的な関わりにとどまるのではなく、継続的な飼育・栽培の中で、成長の様子を見守ったり、動植物と触れ合い、関わりあったりすることを通してこそ、生命を尊重する心や態度が生まれると強調されている。



	記数数
前文	1
第1章 総則	3
第1節 用語	1
第2章 各教科	29
第4節 理科	29
第5節 生活	1
第3章 特別の教科道徳	9

「生命」44か所

新学習指導要領では、「生命」の記述が44か所あり、「命の教育」を求めている



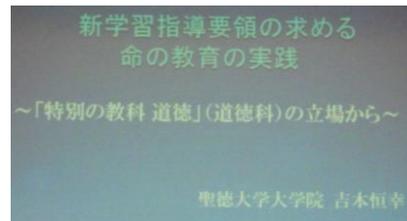


聖徳大学教授・吉本先生（以下、抄録より抜粋）

「よりよく生きようとする心」に対する援助や働きかけの「特別の教科 道徳」は、小学校では平成30年から全面実施される。

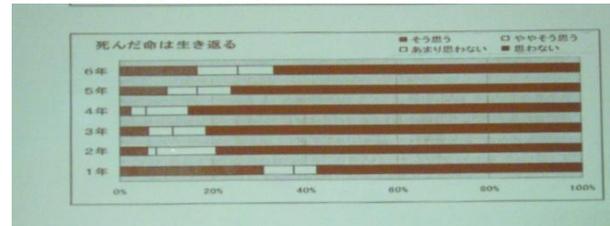
道徳教育では、人間としての望ましい生き方を4つのカテゴリーに区分している。動物飼育や生命に関わる活動はカテゴリーの一つ、「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する事」に属している。このカテゴリーは、「自然愛護」と「生命の尊さ」の二つの要因等から構成され、自然愛護は動植物の世話をしたり、動植物に優しくしたり、かわいがったり、一緒に遊ぶことで涵養される。生命の尊さは、生命の存在に気づいたり、生きていることを喜んだり、生命を守ったり、生命を大切にすることで涵養される。両者の関係は双方向にあり、身近な動物との直接体験が緊密であるほど生命に関する感性が磨かれる。

子供たちの主体的な創意工夫を重視すると、命に関する関心と思いを高めることになる。

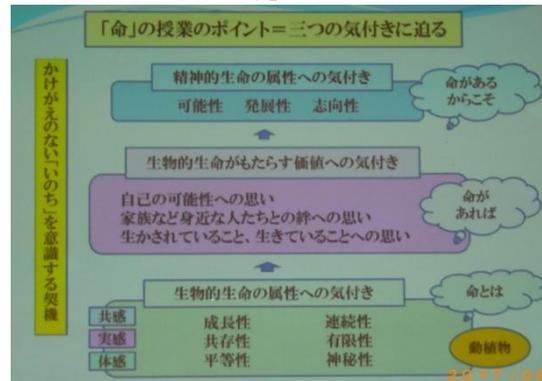


10年前の、東京都の小学校一校、児童数724名での単独調査ではあるが、「死んだ命は生き返るか」の問いに対して、

5・6年生で10~20%が「そう思う」、「ややそう思う」と答えていた。3・4年生よりも高いことは、生物学的な生き返りを意味してそう考えているのか、精神的な生き返りを意味してそう考えているのか・・・（下図）



三つの気づき「命とは」、「命があれば」、「命があるからこそ」を成長性や連続性などの「～性（属性）」と関連付けて意識することが「命」の授業のポイント（下図）

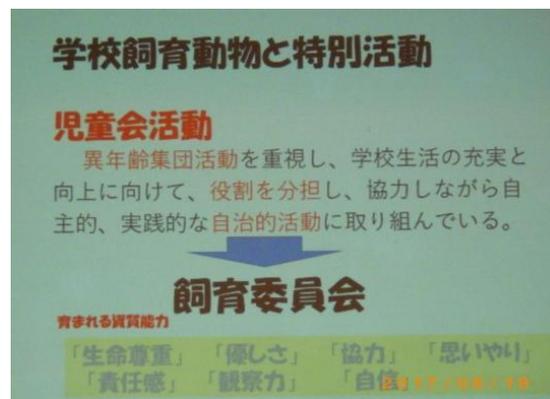


帝京大学教授・若林先生（以下、抄録より抜粋）

新学習指導要領では特別活動の重要な点として「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」をあげ、「学校生活を送る上で基盤となる力を育成し、社会で生きていく力を育む」、「協働性、異質なものを認め合う土壌を育む」、「学力の向上」や「学級、学校文化の醸成へとつながることから海外で高い評価を受けている」ことから更に特別活動が期待されている。児童が動物たちのためになることを自主的に進めていくうちに自らの実践活動に誇りを持ち、動物を大事にする気持ちを深め、充実した活動へと深まっていき、特別活動における学校飼育動物の取組の意義は極めて深い。



特別活動の延長線上には、不登校気味の児童や勉強が苦手、おとなしい、緘黙（かんもく）気味の児童の、豊かな心を育むことも期待できる。



2017年8月9日（水曜日）県教育総合センターでの飼育担当教員研修会報告

